

華人アイデンティティは華語・華語教育でどこまで語れるのか

—JAMS 関西例会「フロンティアのマレーシア華人」報告—

信田敏宏・篠崎香織

2005年7月22日、国立民族学博物館にて、JAMS 関西例会を開催いたしました。今回は、国立民族学博物館・地域研究企画交流センターの共同研究会「イスラム教圏東南アジアにおける社会秩序の構築と変容」との共催で開催いたしました。出席者は19名。予定の時間を大幅に超過するほど、活発な議論が展開し、前回に引き続き盛況な会となりました。

今回は、「フロンティアのマレーシア華人」という共通論題を掲げ、マレー半島、サバ州、サラワク州それぞれのマレーシア華人が置かれた状況についてご報告いただきました。以下、発表者の方々による要旨と参加者による報告を掲載いたします。(信田)

〔報告1〕

タイ・マレーシア国境東部に生きる華人：

「華人」化と「タイ」化のはざままで

華文小学校における「国民化」の事例から

高村加珠恵(東京外国語大学大学)

東南アジアにおける国民国家の実践は、その国民を形成する過程において、同時にそれぞれの規準においてそのメンバーをカテゴリー化し分類してきた。こうしたプロセスにおいて、中国系住民はそれぞれのナショナルな枠組みの中で位置づけられ、そのイメージが構築されてきたのである。マレーシアにおいては明確な境界線に基づき、Melayu(マレー)、Cina(中国系)、India(イ

ンド系)という民族集団から構成される社会を想定して国民国家建設が行われたことにより、Cina という公的な民族カテゴリーの中で「華人」という「我々意識」は保証され、維持されてきた。しかしながら一方のタイ側においては、「タイ」という単一の国民性を基盤とする国民国家形成の中で、「タイでないもの(un-Thai)」が排除されていくことによって、Khonjin(チャイニーズ)はその国民のカテゴリーから排除され、中国系住民は「タイ」という範疇にある種暴力的に組み込まれていったのである。つまりタイ・マレーシア国境という空間においては、中国系住民に対して全く異なる国民国家のエスニシティ管理の実践を見ることが出来る。

本発表では、特にマラヤ独立直後の国民化プロジェクトについてのローカルな経験について着目し、タイ・マレーシア国境東部に位置する華文小学校というある特定の場から考察した。この華文小学校は、もともと国境を越えたタイ側の中国系住民の強い希望によって建てられたものであり、その設立の背景自体が、タイ、マラヤという2つの国民国家の異なる実践に起因する。本発表では、この小学校に対する国民化、国境画定化のローカルなインパクトを、1950年代末に発生した越境学生に対する取り扱いをめぐる事件を中心に、マレーシア国立公文書館の資料を用いて考察した。また資料分析だけではなく、この学校に実際に在籍した越境学生の事例から、マラヤに

おける国民化のインパクトに対して個人がどのように交渉を行っていったのかを考察し、国民国家の一方向的な実践だけでなくそのローカルな葛藤、交渉という双方向性のリアリティの提示を試みたものである。(高村)

*

まず、問題意識と事例の関連性に対してコメントが寄せられた。本報告の問題意識は、タイ・マレーシア国境という空間において、中国系住民に対して全く異なる国民国家のエスニシティ管理の実践があるのはなぜか、というものであった。これに対してフロアからは、育英小学校の事例から国民国家の確立・強化が国民以外の人びとの排除につながったという側面を見出すことはできそうだが、報告者の問題意識を解明する有効な説明はあまり見出せないように思われるとの指摘がなされた。

事例の読み取り方に対して、報告者とは異なる見解がいくつか示された。報告者は1958～59年にクランタン州教育部が育英小学校に対して、タイからの越境通学者の新たな入学を認めないという立場を取ったことを、国家介入の強化による国民でない人の排除と解釈した。これに対してフロアからは、クランタン州教育部が育英小学校から問い合わせを受けてから回答した点や、タイ人学生の有無の確認を同校に「依頼」するに留めていた点から判断すると、国家の介入はそれ程強いものではなかったように思われるとの指摘がなされた。また、タイ人越境通学者の存在は、タイ政府が国民を国境の中に囲い込むことをそれ程強力に行っていなかったことを示しているの

ではないかとの見方も示された。

越境を1つの生活資源としている人びとが国家の介入に囲い込まれていく側面よりも、新たな状況の中で柔軟にしたたかに対応してきた側面をさらに深く読み込んだ方が、クランタンらしさ、あるいは国境の町らしさを描けるのではないかと意見も出された。(篠崎)

(報告2)

「現地化」の諸相

—ある華人のファミリー・ヒストリーを通してみた

サラワク華人社会の地域性 -

市川哲(東京外国語大学 PD 研究員)

本発表はサラワク華人のエスニックな特徴や自己認識の変化を、「現地化」という観点から分析した。「現地化」という概念は、現地の華人自身によって使用される民俗用語ではない。現地の華人は、同化や本土化といった表現を使用する。これらの語はマレーシアで生まれ育ったことにより獲得したローカルな特徴について言及する際に用いられる傾向がある。そのため、サラワク華人にとっての現地化も、現地で世代を下るに従い、中国志向からマレーシア志向へ、という、華僑から華人へ、という社会的立場やアイデンティティの変化と平行している。だがマレーシア華人のエスニシティの現地化を、マレーシアという国家への一方向的な同一化として捉える姿勢は、華人のエスニシティを過度に均質化して捉えてしまい、ミクロなレベルで存在する、エスニシティの統一性と重層性の相互関係を軽視してしまう恐れがある。

以上の問題意識に基づき、本発表ではサラワク州のある華人家族の三世代にわたるファミリー・ヒストリーを事例として取り上げた。そして特にそれぞれの世代の生活経験に注目し、それが中国からサラワクへの移住、サラワク域内での移動、さらにマレーシア国民としての定住化の中で、いかなる現地化の過程に置かれているのかについて報告した。

本発表で取り上げた三世代にわたるサラワク華人のファミリー・ヒストリーを検討すると、マレーシア生まれの世代が、次第にマレーシアという国家の国民として、あるいはマレーシア華人として、ナショナルなアイデンティティを獲得してゆくのと同時に、ミクロなレベルでは、それぞれの居住地の他の華人や他の民族集団との関係の中で、ローカルなレベルでのアイデンティティや生活様式を変容させていったことが明らかになった。マレーシアにおける華人のエスニシティは、ナショナルなレベルでの現地化と共に、居住地ごとの、よりローカルなレベルでの現地化との同時進行として捉える必要がある。マレーシア華人のエスニシティは、華人としての統一性と共に、それぞれのローカルな特徴に基づく重層性との間で、さまざまなレベルで変化している。いわば、華人としてのあり方は必ずしも単一なものではなく、個々の華人が置かれる状況に従い、さまざまな形態がありうるのである。(市川)

*

本報告は「『現地化』の諸相」と題し、「マレーシア華人のエスニシティの具体的な様相を把握する」ことを目的に掲げていたが、本報告で「現

地化」とはどの範囲を指すのかというコメントがあった。華人のエスニシティの現地化を「マレーシアという国家への一方的な同化として捉える」ことに批判的でありながら、サラワクの事例を最終的に位置づけようとする範囲がマレーシアのみに限定されているようであり、「現地」での事例をマレーシアというレベルに引き付けて位置づける必要はないのではないかとの指摘がなされた。

本事例では、イバン人やマレー人の言語・文化的要素を吸収しても華人としての意識を維持する事例が示されたが、これに対してイバン人女性と結婚し、華人コミュニティから排除され、マージナルな存在になっていく華人男性もいるという事例がフロアから紹介された。ただし、ある社会においてマージナルな存在になりつつあると見えても、他の社会関係への参入を深め、そこで中心的存在になっていく場合もあるだろう。

本報告は、「サラワク華人のエスニックな特徴や自己認識の変化を『現地化』という観点から分析する」試みであった。これに対し、アイデンティティは本人の意気込みだけでは済まない部分があり、本人の意気込みに対する周囲からの反応によってアイデンティティが変化を余儀なくされる場合もあるとし、周囲の対応も考慮する必要があるのではないかとの指摘もなされた。(篠崎)

〔報告3〕

「辺境」の華人から問うマレーシアの国民国家
—サバ州華語教育の変遷を手がかりに—

田村慶子(北九州市立大学)

サバ州の華人社会は、半島マレーシアとは異

なるいくつかの特色を持つ。第1に、サバ華人は2000年統計で州総人口約260万人のわずか10.1%にすぎないマイノリティであること、クリスチャンが多いこと(31.3%)、客家が50%以上を占めていること、さらにまた、中国からの政治的影響がほとんどなかったこと、他のエスニック・グループとの紛争がほとんど皆無であっただけでなく、先住民カダザン人と結婚した華人(Sino-Kazadan)も多く、華人(非ブミプトラ)とブミプトラ間のエスニックな境界が比較的低いこと、などであろう。本報告は、半島マレーシアとは異なるサバ華人社会の歴史と現状を、華語教育に焦点を当てて分析するという試みである。

1950年代、イギリス植民地政府は、異なる言語を授業言語とし、それぞれ異なるカリキュラムをもっていたそれまでの様々な学校を一元的に管理し、かつ英語を共通語とする統一的な教育制度を構築した。華語小学校も補助金を得る代わりに英語が必修となり、華語中学校は授業言語を徐々に英語に切り替えていくことになった。

このような状況ゆえに、サバが1963年に新連邦マレーシアに参加する際の「20項目保障規定」の重要なものが、言語(マレー語を連邦の国語とすることは認めるが、英語はサバの公用語である)と教育(現行教育制度を維持する、そのために教育を州の管轄とする)であった。また、サバではムスリムが少数であることも考慮されて、宗教についても、イスラム教をマレーシアの国教とすることは認めるが、サバは州の公式宗教を持たない、と保障された。しかしながら、周知のごとく、「20項目保障規定」は徐々に変更され、1973

年にマレー語がサバ州の公用語となり、1976年に教育は州の管轄から連邦管轄へ移管され、学校制度は半島マレーシアの制度に統一された。また、1973年にはイスラム教が州の公式宗教になった。

1970年代、華語の中等教育機関は私立の独立中学(独中)となって存続したが、学生数は激減した。1975年、サバ州独中理事会は、華語、国語(マレー語)、英語を習得しつつ3言語を平等に科目別の授業言語に用い、また後期課程では英語の比重が高いというユニークな3言語教育政策を推進することを決定した。この政策の下、サバの独中では全国独中の中等教育修了試験である華文独立中学統一試験は全員必修であるだけでなく、国内の教育資格(SRP、SPM)にも多くの学生を受験、合格させている。3言語教育政策が採用されたとき、サバの華人社会は独中学生の負担の大きさを懸念したが、各種試験の合格率の高さなどによって、1980年代から寄付も順調に集まるようになったという。学生数も1980年代から増加し、国民型小学校から独中への進学率も半島マレーシアよりも高い。

このようなユニークな言語政策を可能にしたのは、英語教育の伝統や「華人アイデンティティ＝華語教育の維持・発展」という意識が比較的薄いとあったサバ華人社会の独自性に加えて、マイノリティであるサバ華人の「生き残り策」でもあったろう。サバの華人は、マレーシアという現実を認めてその中でどのように生き残っていくか、同時にグローバルな国際社会にどう対処していくかを模索し、かなりの成功を収めていると言えよう。

(田村)

*

本報告は、サバにおいて独立中学校の生徒数が1970年代に激減した一方で80年代に増加に転じた現象を、サバの華人が華語教育をアイデンティティのより所としていなかったことから説明した。これと関連して報告者は、サバではエスニック集団間の障壁が半島部よりも低いことを指摘した。

これを受けて、なぜサバではエスニック集団間の障壁が低いのかという質問が出された。これに関してフロアから、半島部ではイギリスが王権を残したためマレー性やイスラムが強調されたが、ボルネオではブルネイ王権がすでに衰退しており、歴史的にも中国との関係性が深かった(ブルネイ王家にも華人の血統が混じっているという伝承がある)ことが影響しているのではないかとの指摘がなされた。

本報告では、サバでは華人はマイノリティであり、華人政党の設立がマレーシア構想以降であったように政治への関与も低く、華人の政治的影響力は小さいことが強調された。これに対して、サバでは華人の州首相が輩出されており、マレーシア構想以前にも華人団体が存在し、木材の伐採権など利権を抑えてきており、政治的影響力は小さくないのではないかとの見方が示された。また報告では中国の影響が小さかったことが指摘されたが、中国国民党の影響は強かったのではないかとの質問がなされた。報告者は、サバでは半島部のように秘密結社や労働運動・共産主義の影響力が存在しなかったという点において

中国の影響が小さかったと言える」と回答した。

(篠崎)

* * * * *

マレーシアの華人に関する研究の多くは、華語および華語教育をめぐる政治過程に着目している。それは日本の研究者に特に顕著であるように思われる。確かに、脱植民地期・国民国家形成期のマレーシアでは華語や華語教育の法的地位が大きな争点になったこともあり、現在においてもこれらの問題が華人の利益とイコールで語られることも多い。この事例から、言語や文化は民族のアイデンティティのバックボーンであるという考え方が強化され、またその考え方が、マレーシア華人にとって華語および華語教育は華人アイデンティティのバックボーンなのだという見方を固定化させてきた。

だが、実際にマレーシアに行ってみると、華語が話せない華人や漢字が読めない華人が大勢いる。その大部分は自らを華人として認識し、その認識に一点の疑いも持っていない。また、マレーシア(およびシンガポール)以外の東南アジアでは、華人と認識する人・されている人が華語を話せないケースも多い。その中には、華人としてのアイデンティティをことさらに強調しない人もいれば、本人が華人であることを否定しても周囲に華人として認識される人、華人としてのアイデンティティを積極的に主張しそれになんの疑いをも持たない人もおり、華人としての自己認識の仕方は様々である。こうした多様な華人性のあり方を、華語および華語教育を通じてどこまで捉えられるかが今後の課題となろう。(篠崎)